

伊万里の日本海流通

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/24725

伊万里の日本海流通

野上 建紀

伊万里の日本海流通の開始

近世の日本海には太く長い「海の道」があった。その道を九州北西部で生産された陶磁器が運ばれていった。「唐津（肥前陶器）」、「伊万里（肥前磁器）」という名で知られる肥前陶磁である。

大陸からの技術導入によって、16世紀末に現在の佐賀県西部と長崎県北部を中心に新興の窯業地が成立し、「唐津」の生産が始まった。豊臣秀吉の文禄・慶長の役の際に肥前の大名が多くの朝鮮人陶工を連れ帰ったことで、窯業地はさらに発展し、17世紀初めには日本で初めての磁器「伊万里」も誕生した。

そして、日本海ルートは瀬戸内海ルートと並んで、早くから唐津や伊万里が運ばれたルートであった。日本海側沿岸では北海道・道南地域に至るまで16世紀末～17世紀初めの唐津の出土例が見られ、その唐津の流通ルートにのって、後発の伊万里も運ばれていった。東日本の太平洋側を主な商圏とした瀬戸・美濃地方の陶磁器と市場を分け合っていた。

伊万里を運んだ日本海の商人

北国・蝦夷地と大坂・瀬戸内を結んだ北前船によって、日本海沿岸に運ばれた伊万里焼もあったが、「旅商」とよばれる買い積み商人が果たした役割も大きかった。日本海側からは筑前商人、下関商人、石見商人、出雲商人、越後商人らが伊万里津（港）に来航して、陶磁器の買い積みを行っていた。特に玄界灘や響灘に面した沿岸に本拠地をもつ筑前商人は全国津々浦々に伊万里を運び、日本海沿岸の地域でも多くの伊万里を売り捌いている。その他、下関商人はその立地の特性を生かして、中継貿易を行った。そして、日本海沿岸の遠隔地の旅商は、それぞれ商圏の棲み分け「卸縄張」を行いながら活動を行っていた。当時の日本海では伊万里を積んだ船が盛んに往来していたのである。

日本海の海底や海岸発見の伊万里

伊万里が日本海ルートで運ばれたことを示す資料として、遺跡から出土する考古資料がある。日本海沿岸の遺跡からは多くの伊万里が出土しているが、陸上の遺跡だけではなく、海底や海岸の遺跡からも発見されている（図1）。船で運ぶ途中、目的地に達することなく沈んだものもあれば、使用された後に捨てられたものもある。どちらも歴史を語る貴重な資料である。



図1 日本海の海底や海岸発見の伊万里

日本海域で伊万里が発見された遺跡や海岸などを西からあげていこう。伊万里港に近く、元寇ゆかりの遺跡としても知られる鷹島海底遺跡（図2、長崎県松浦市、17～19世紀）を皮切りに、玄界灘沿岸をなぞるように池尻海底遺跡（図3、佐賀県玄海町、19世紀の染付端反碗）、芦屋沖海底遺跡（図4、福岡県芦屋町・岡垣町沖、19世紀の碗・皿・香炉・火入れなど）、岡垣浜（福岡県岡垣町、17～19世紀）と続く。さらに石見銀山の積出し港として知られる沖泊（写真1、島根県大田市、18～19世紀）、舩倉島沖（図5、公海、17世紀末～18世紀初めの染付皿）、能登飯田海岸（石川県珠洲市、主に18～19世紀）、陸奥湾脇野沢沖（写真2、19世紀の染付瓶）と日本海のルート上をたどり、北海

道の上ノ国漁港遺跡（北海道上ノ国町、17～19世紀）にまで至る。

池尻海底遺跡、芦屋沖海底遺跡、岡垣浜、舩倉島沖、陸奥湾脇野沢沖の伊万里は、運搬中に何らかの海難にあい、沈んだ積荷の一部であろう。その他は性格が曖昧なものが多いが、沖泊や上ノ国漁港遺跡の伊万里は、それぞれの港が日本海ルートの結節点として機能していたことを物語る資料と言える。

日本海ルートと蝦夷地

幕末に蝦夷地に運ばれた伊万里の中にコンブラ瓶とよばれる醤油や酒を詰めるための瓶がある。醤油や酒を海外輸出するための瓶であり、胴部に

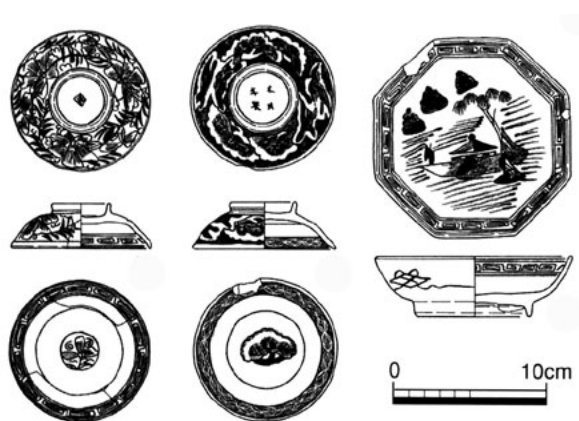


図2 鷹島海底遺跡出土伊万里（鷹島町教委 1992）

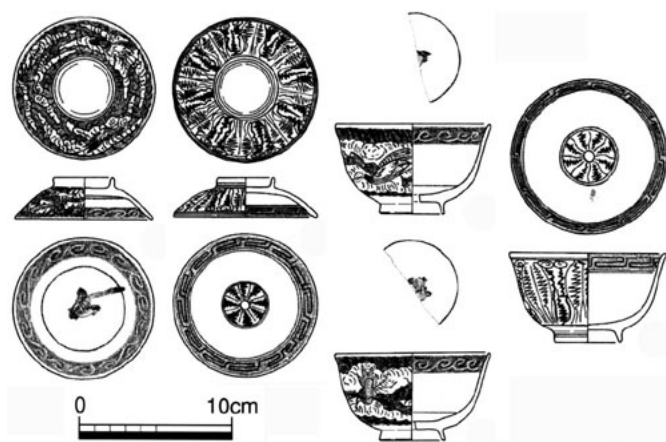


図3 池尻海底遺跡発見伊万里（東中川 1995）

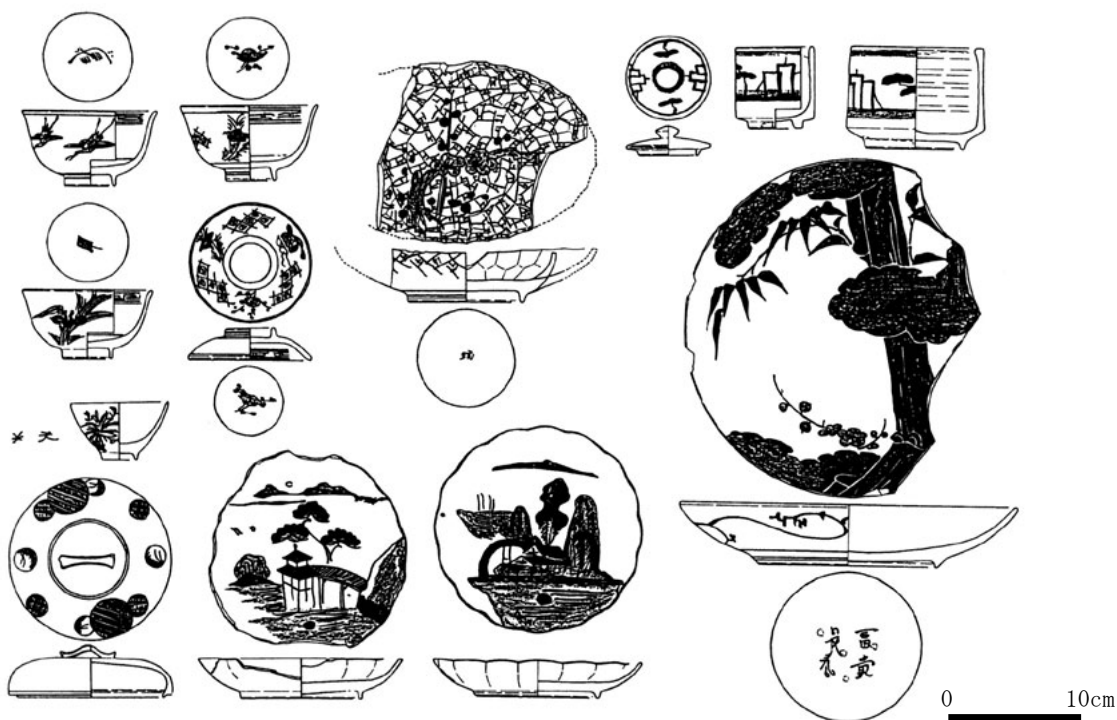


図4 芦屋沖海底遺跡発見伊万里



写真1 沖泊発見伊万里 (撮影：山本祐司)

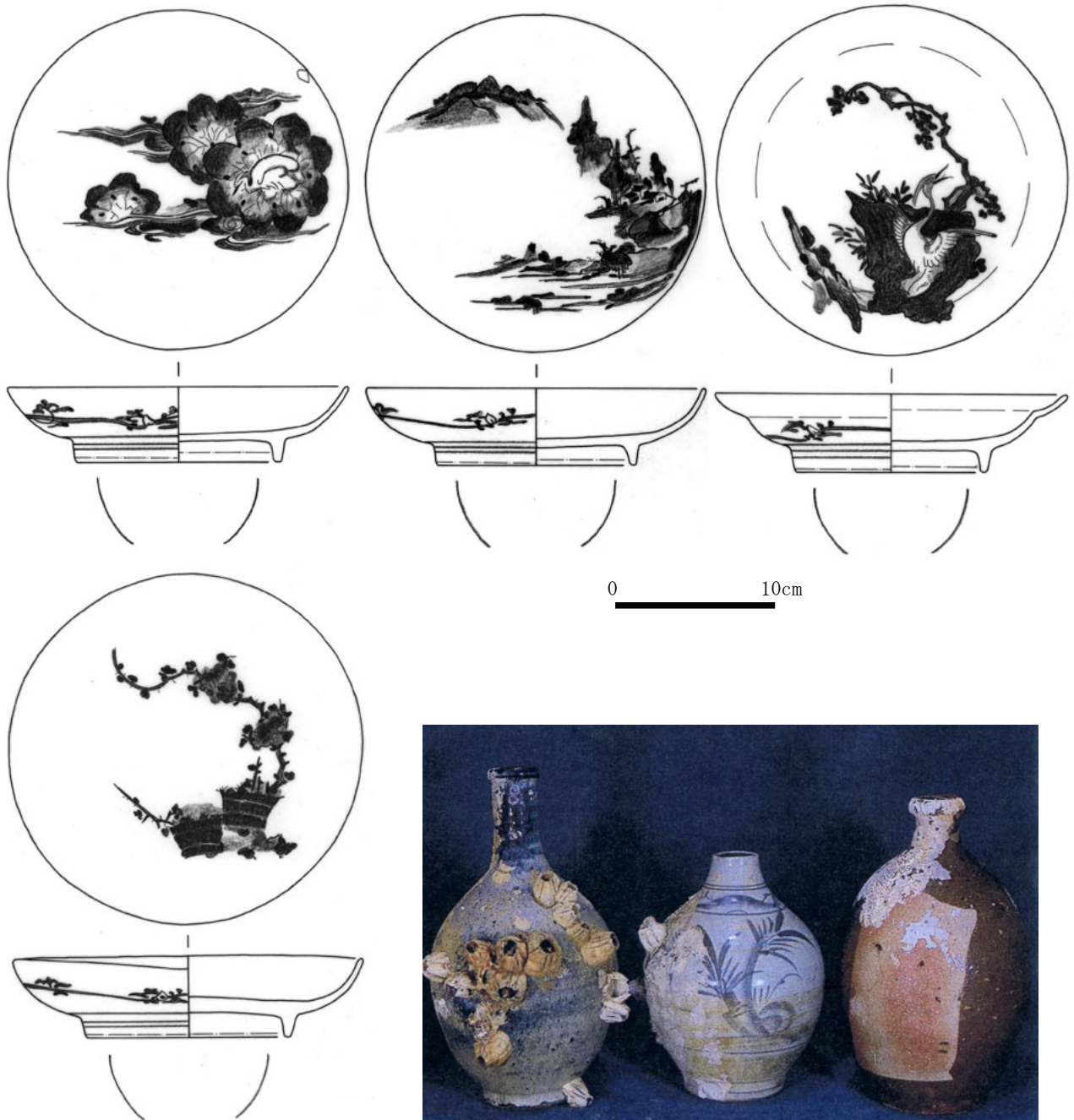


図5 舢倉島沖発見伊万里

写真2 陸奥湾脇野沢沖発見陶磁器 (中央が波佐見笹絵徳利)
(青森県史編さん考古部会編 2003)

JAPANSCHZOYA（日本の醤油）、JAPANSCHZAKY（日本の酒）と染付されている（図6-3～5）。文字は手描きのものが多いが、型紙摺りによるものもある。主に長崎県波佐見諸窯で生産されたものである。窯跡では三股諸窯、永尾本登窯や中尾上登窯で出土している。国内の消費地遺跡では長崎の出島和蘭商館跡から大量に出土するが、その他、北海道内の遺跡で出土する例が多いことが知られている（扇浦 2006、p82）。醤油や酒をどこで詰めるか、あるいは表示の通りに実際に詰められたものが北海道に運ばれたものか、不明な点もあるが、日本海ルートによって運ばれたのは間違いなからう。扇浦正義はコンプラ瓶の生産と流通について述べる中で万延元年（1860）に佐賀藩士が函館に派遣され、肥前陶磁を販売していたといわれることを紹介し、幕末期に九州と北海道を結ぶ肥前陶磁の販売ルートが開けていたことを指摘する（扇浦 2006、p82）。

そして、北海道におけるコンプラ瓶をはじめとした伊万里の出土状況については、関根達人の報告に詳しい。関根は北海道から出土する陶磁器は、19 世紀中葉に爆発的に増加し、本州と比較した場合、器種の偏りという点で際立った特徴をもっていることを指摘する（関根 2009、p316）。さらに関根は伊万里の磁器膾皿、高取焼甕、徳利（肥前笹絵徳利・コンプラ瓶・越後産焼酎徳利）を「蝦夷地 3 点セット」と称し、これらがアイヌの集落跡を含め、19 世紀中葉の北海道の遺跡で普遍的に出土するという（関根 2009、p316）。蝦夷地 3 点セットの生産地との位置関係を考えれば、日本海ルートでそれらが運ばれたことは間違いなからう。

そして、日本海の海の道は、蝦夷地を中継地として、さらには遠くカムチャッカ半島にもつながっていた。カムチャッカ半島のジュパノヴォ遺跡で日本製の寛永通宝やキセル・刀子とともに、17～18 世紀の伊万里が出土していることが紹介されている（大橋 2000、p58-61）。また、幕末には前掲のコンプラ瓶がロシアにも運ばれている。扇浦正義はロシア文字が記されたコンプラ醤油瓶を紹介し、ロシア向けに醤油を輸出していたことを指摘している（扇浦 2006、p83）。

日本海ルートの終焉

江戸時代から明治時代となってもまだ伊万里は伊万里港から船で積み出されていた。岡垣浜に打ち上げられる陶磁器の中には型紙摺りの製品など明治時代の伊

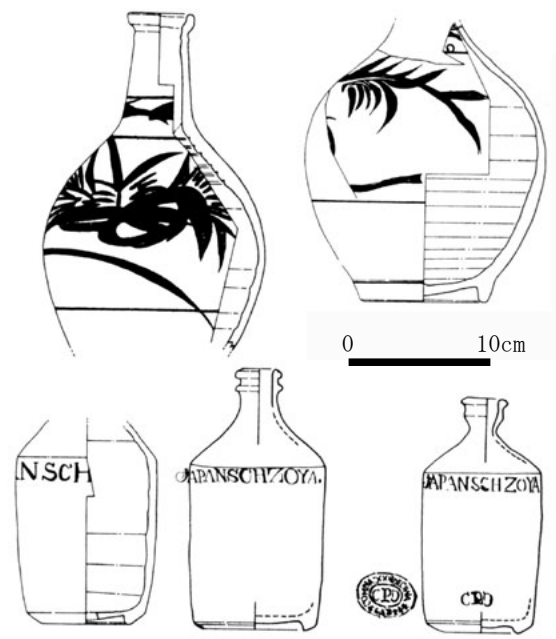


図6 波佐見笹絵徳利（1・2）・コンプラ瓶（3～5）
（中野 2000）

万里が数多く含まれている。しかし、19 世紀末（明治 30 年）に有田で鉄道が開通すると、生産地の有田から直接、陸路で輸送されるようになり、300 年近くにわたって日本海沿岸に磁器を供給してきた日本海ルートは終焉を迎えることになった。

文献

- 青森県史編さん考古部会編 2003『青森県史資料編考古 4 中世・近世』青森県史友の会
- 扇浦正義 2006「コンプラ瓶の生産と流通」『日本海域歴史大系』第五巻近世篇Ⅱ p81-84
- 大橋康二 2000「北方、カムチャッカ発見の伊万里」『目の眼』No. 289 里文出版 p58-61
- 関根達人 2009「北日本（北海道・青森県・岩手県域）における江戸時代後期の陶磁器の流通」『江戸後期における庶民向け陶磁器の生産と流通-関東・東北・北海道編』九州近世陶磁学会
- 鷹島町教育委員会 1992『鷹島海底遺跡』
- 中野雄二 2000「波佐見」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 東中川忠美 1995「玄海町池尻海底遺跡出土の蓋付端反碗」『研究紀要』第 1 集 佐賀県立名護屋城博物館 p1-5

(takenori_n@hotmail.com)